

マルコ 6・1-6

今日の福音から、私たちは何を読み取り、何を学ぶべきなのでしょう。

今日の福音は、イエスを迎えたイエスの故郷で起こった出来事を語っています。しかし、注意深く味わうと、今日の福音はそこで起こった出来事を語ることによって、そこで起こらなかったことを語ろうとしているのではないかとも思われます。先週の日曜日、私たちは、イエスの衣にすがりつくことによって不治の病を癒された女性の物語と、愛する娘を失った会堂長のヤイロのためにその子を生き返らせてくださったイエスの驚くべき奇跡の物語を味わいました。

けれども、今日の福音のイエスの故郷の場面では、そのようなことは何も起こらないのです。今日の福音の全体は、先週の福音におけるイエスと、今日の福音のイエスが私たちに示している明暗は何によるのかということ私たちに問いかけているように思えないでしょうか。先週の福音の場面では、あのような目覚ましい力ある業をなされたイエスが、今日の福音の故郷の場面では、「ここでは、ごくわずかな病人に手を置いて癒されただけで、その他は何も奇跡を行うことがお出来にならなかった。」と語られているからです。

今日の福音は、「イエスはそこを去って、故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った」という場面設定のことばによって始まっています。今日の福音はマルコ福音書の6章のはじめの部分ですが、「イエスはそこを去って、故郷にお帰りになった」と語り始めることによって、マルコ福音書は意図的に先週の福音の出来事と今日の福音の場面とを結び合わせようとしているように思えます。

もう少し、今日の福音の出だしの部分にこだわって味わってみると、ここでは、イエスの故郷の地名が出てこないことに気がきます。イエスがお育ちになったイエスの故郷はナザレであることを私たちは知っています。イエスはその出身地である故郷の名によって、ナザレのイエスと呼ばれていたことも知っています。それにもかかわらず、マルコ福音書はなぜここで、ナザレというイエスの故郷の名を語ろうとしないのでしょうか。イエスの故郷がナザレであることは広く知られていることであるので、それに触れる必要はないと思ったのかもしれません。しかし、ここにも、今日の福音によってマルコ福音書が語ろうとしていることの隠された意図を見出すことが出来るかも知れません。マルコ福音書があえてイエスの故郷の名を語らないのは、ナザレの地名を挙げれば、今日の福音が語ろうとしていることは、かつて、ナザレというイエスの故郷の町で起こった出来事に限定されてしまうからです。そのために、マルコ福音書

はあえてその名をここで省略しているのかもしれませんが。

最近フランシスコ会聖書研究所から一冊にまとめられた聖書の新しい翻訳が出されましたが、その前には、岩波書店から新約聖書の新しい翻訳が出されています。岩波書店から出された翻訳は、最近の聖書学の成果に基づいて、出来る限り原文に忠実な翻訳を提供するというを目的にしたと謳っています。今日の福音の最初の部分は岩波書店から出された翻訳では次のように原文から直訳されています。「そして彼はそこから出て行って、彼の故郷（の町）にやって来る。また、彼の弟子たちが彼に従う。」この訳に従えば、イエスは故郷に帰られたのではなく故郷に来られるのです。そしてイエスの弟子たちは、そのイエスの後について、今日の福音の場面に立ち会うよう招かれているのです。イエスの弟子たちは、あの時の弟子たちだけではなく、今日の福音を聴く私たちでもあるのです。私たちも、イエスの後に従って、今日の福音が語ろうとしていることに立ち会うように求められているのです。

イエスは御自分の故郷に来られることによって、何をなさろうとしておられるのでしょうか。故郷に錦を飾るということばがありますが、イエスにとって故郷とはそのようなところではありません。今日の福音はマルコ6章に語られている場面ですが、マルコ福音書はこの前にも、おそらくナザレに住んでいたであろうイエスの身内の人々を登場させています。その人々は、「イエスのことを聞いて取り押さえに来た。『あの男は気が変になっている』と言われていたからである」と語られています。イエスの母と兄弟たちが訪ねて来たとき、イエスは「わたしの母、私の兄弟とは誰か」と言われ、周りに集っている大勢の人々を指し示して、「ここに、わたしの母、私の兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、わたしの姉妹、また母なのだ」と言われたのでした。ナザレは確かに母マリアがおられるイエスの故郷ですが、イエスがそこに来られるのは、他の土地と同じように、安息日の会堂でみことばを宣べ伝えることが目的なのです。そのようなイエスを迎えたナザレの人々の反応は、今日の福音に語られているとおりであったのです。

「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」というイエスの口から漏れるみことばを、私たちはどのように聴いたのでしょうか。ナザレの人々の間で洩らされたイエスのみことばを私たちは今日のミサの中で聴いています。このイエスのみことばをナザレの人々に向けられたみことばとして聴くだけでは、私たちは今日のミサの中で本当にはイエスをお迎えしていることにはならないのかもしれませんが。

今日の福音が私たちに求めていることは、私たちのイエスとの関わりがナザ

レの人々のようになってしまうのではないかということに反省することであるかもしれません。私たちもまた、あまりにも私たちの信者としての生活に慣れすぎてしまっているかもしれません。あまりにも私たちの教会に慣れすぎてしまっているかも知れません。日曜日こうしてささげるミサに慣れすぎてしまっているかもしれません。

私たちは、心のどかで、私たちがどんなに祈っても、先週の日曜日に聴いたイエスの力あるみわざは、私たちの中に起こるはずはないと決めてかかっているかもしれません。しかし、本当にそうなのでしょう。確かに、私たちは先週の日曜日に聴いたようことが、私たちの中でイエスによってなされることを経験することはないでしょう。けれども、私たちが信じているイエスは、病の絶望の中から私たちを救いだしてくださるお方であり、死の闇から私たちをいのちの光の中に立ち上がらせてくださるいのちの主です。そのいのちの主であるイエスが、今日も私たちをここに呼び集めてくださり、十字架の上で私たちのために与え尽くしてくださったいのちを、聖体の秘跡を通して私たちの注ぎ込んでくださるのです。

今日の福音の結びは、「イエスは人々の不信仰に驚かれた。それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった」と締めくくられています。私たちの中に確かに来て下さるイエスが、あのナザレのときのように、私たちの間を通り過ぎてしまうことのないよう、心を込めて今日のミサをおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高